

『室戸岬』

日南海岸をドライブしていると、徳島から高知県室戸岬への海沿いの道を思い出す。どちらの道も西側に山があり、急な斜面が続く。斜面は黒潮や海からの風の影響を受け、亜熱帯要素を含む照葉低木林が成立している。低木林は苛酷な環境に成立しやすい。そこに道がある。

大学2年生の3月上旬、自転車に小型テント、寝袋などを載せ、広島の家を出た。目的は自転車で四国一周である。自分の力を試したいというのが動機である。様々な理由はあるが自分は大学受験を最後まで走り抜いたとは言えず、そのやらなかった（やらせてもらえなかった）という過去がその後の全てを後ろ向きにさせていた。自信となるものを作りたいという思いだった。

初日は100 km程走り、しまなみ海道の途中の島を野宿場所に決めた。砂浜で自炊し、優雅に夕日を見ながら食事をした。テントを張るのが面倒臭くて、公園の手洗い場の下に潜り込み寝ることにした。しかしまだ3月上旬、持ってきた服を全て着てみたが、寒すぎて一睡も出来なかった。朝方3時頃、寝ることを諦め自転車をこぎ始めた。動いたことで体が温まった。足取りも軽く、朝方、四国の今治に上陸した。上陸してすぐ一人の老人に話しかけられた。老人は車椅子に乗っていた。車椅子にはゴミ袋が沢山ぶら下げてあった。かなりやつれて身なりも汚らしかった。変な人に話しかけられたと思ったが、疲れていたし何か面白い話が聞けるかとも思った。どうやら、3日間かけ、車椅子で50 km程離れた松山から旅をして来たようである。老人は、寝袋など持っておらず、夜は車椅子の上でそのまま寝たそうだ。思わず「死んでしまいますよ」と言ってしまった。老人は豪快に笑って、「この旅は、亡くなった伴侶との思い出の地を巡る旅。家も引き払った。これは、わしの人生の終着点。」と語った。覚悟を決めた表情とその言葉が胸に焼き付けられた。（もう生きてはいないだろうが、今でもこの人を尊敬している。）続けざまに、「君は、今から四国を周るつもりかもしれないが、これから多くの困難がある。半分も周れず、高知にたどり着く前に、自転車も君の体もボロボロになる。ここで引き返さない。そして生涯を添い遂げる伴侶を見つけなさい。」と言われた。彼女がいらないなど言った覚えはない。そして、引き返さないという言葉が気に入らなかった。自転車が壊れたなら自分で修理し、身体が壊れても血を吐きつつ吐きつつ前へと進んでやろうと思った。実は少し心が折れかかっていたが、この老人が火を着けてくれた。老人と別れ、香川県入りを目指した。今治の市街地を抜け田園地帯に入り、平坦な道が続いた。香川入りは余裕かと思われたが、ここで天気が急変した。道路の電光掲示板には、四国全域に暴風警報と書いてある。トラックが傾くような風だった。何度も飛ばされ、転倒し、車に轢かれかけた。命の危険を感じ、道路横の斜面に伏せた。雨は防げないが、風は防げる。土砂降りの中、風が弱まるのを待った。老人のことを思い出し、予言者か妖術師だったのでは無いかという気がした。ただ、それよりも「伴侶を見つけなさい」という言葉が頭の中をグルグル回り、彼女欲しいなあ…と切実に思った。広島に帰るころには、ホワイトデーである。予定は何も無い。こんな台風のような状況で、一人孤独に草むらに伏せ、車が跳ばしてきた泥水を浴び、もはや何をやっているのかが分からない。老人に焚きつけられた火など、完全に鎮火した。けども、今更帰るのも面倒臭い。とにかく、寝床を探して前に進むしかない。隙を見ては自転車を押し、風が強くなれば何処かに隠れる、これを繰り返した。気が付けば、日が暮れていた。明るい内に寝床を探す必要があるのだが、この日はどうしても無かった。何とか四国中央市にたどり着き、公園のトイレに逃げ込んだ。コンクリートの建物がこんなに安心感があるとは思わなかった。水道もあるし、まるでホテルだと思ってしまった。安心して寝てしまった。

3日目、当たり前だがトイレで目覚めた。人生初めての体験である。とにかく、前日は香川に入ることが出来なかった。その日は、香川を通り徳島を目指すことにした。まだ四国全域に暴風警報が出ていた。そして、身体はボロボロだった。全身筋肉痛、サドルに座るとお尻に激痛が走る、排気ガスの影響で皮膚に炎症が起き、肺も苦しい。汗や雨で濡れた服は替えが無く、寒さで体力が奪われ



『2021 Google マップを加工して作成』



初日の宿 『手洗い場』

る。鼻血まで出てきた。鼻栓をするともう片方の穴から鼻血が出た。両方ふさぐと口へと逆流した。ただただ痛みに耐え、鼻血を出しつつ出しつつ走った。朦朧としていて、この日はほぼ記憶が無い。讃岐うどんが美味しかったことは覚えている。それから、ある峠とある町を覚えている。ある町への道が、海沿いの平坦な道か、山を越える道どちらかを選ばなければいけなかった。これまでの道はほとんどが平坦な道だった。海沿いの平坦な道を選ぶと何かに負ける気がして、山を選んだ。今思うと大した山では無かったのだろう。だけどそのときの自分には、本当に険しい山に思えた。強風は向かい風、こげどもこげども自転車は進まなかった。自転車を降りて坂道を押して歩く、そんなことは絶対にしたくなかった。“自転車から降りたら死ぬ”、小学生の“道路の白線以外を踏んだら死ぬ”と同じ勢いでルールを守った。淡々とこぎ続け、峠を越えた。たどり着いた先は、絶景だった。寂れた小さな漁村、誰も絶景とは言わないだろう。ただ、自分にとっては、困難を乗り越え勝ち得た景色。ただただ、絶景だった。



香川県-徳島県 県境

4 日目、テントをたたみ、徳島城を出発した。この日も南からの風が強く、向かい風だった。この日の目的地は定まっていなかった。高知との県境まで約 100 km、そのうち 60km は山の中である。昨日の山の比では無い。さらにその先は、約 50 km先の室戸市まで、コンビニは疎か野宿出来そうな公園も無い。ちょうど、鹿児島市（北部）から山を越えて日南市までが約 100km、日南市から宮崎市のイオンモールぐらいが約 50km である。体力などを考慮し、高知との県境まで行ければ良いほうだと思った。いや、自分の力では、高知との県境を超えることが出来ない、それが限界だと決めつけたのである。ただ、妥当な判断ではあった。その妥当な限界値に向け、これまで通り、ただひたすらに前へ前へと進んだ。山を越えても、山が現れた。そしてまた山が現れる。無限の苦行の様に感じられた。この苦行に何の意味があるのか、それを考えるのも億劫だった。家に帰れるならば帰りたい。もうやめたい、もうやめたい、もうやめたい…と叫びながら走った。大学受験の時も同じだった。勉強すれどもゴールは見えず。無限の苦行に思えた。辛くて逃げ出したかった。親との話で、第一志望校を受けない（受けさせてもらえない）と決まったとき、実は安堵していた。親に反抗しても良かったはずである。だが、それをしなかった。結局は逃げたのである。ただ、今回は逃げられない。逃げてはいけない。そして、妥当な限界値で良いはずがない。その先を目指してこそ、この旅の意味がある。県境のさらに先、室戸岬を目指すしかないと思った。そして、そこで夕日が見たいと強く思った。日没までに室戸岬に辿り着くと心に決め、全力で走り始めた。山を抜け、高知県に入ったのは4時半頃だった。残り 50km、おそらくあと 2 時間ほどで日は沈む。これまでの平均時速は 15km/h 程度。単純計算で約 3 時間かかる、間に合わない。そして 100km 走った後である。さらには相変わらず向かい風。だけれども、室戸岬で夕日を見なければならぬ。無理だという思いもあったが、ここは人生の大事な分岐点。出せる力を全て出し、走った。途中、太陽が西側の山脈に沈み、日が暮れてしまった。この時だけは自転車から降り、立ち止まってしまった。さすがにもう無理かもしれない。そう思った。だけれど、これが勝手な決めつけである。そうやって限界を決めつけたがる。最後までやってみなければ分からない。だから、走った。尾根に橙色が残るのを確認し、それを支えにした。室戸岬に着いたのは6時過ぎだった。太陽は水平線よりわずかに上で、赤々と燃えていた。岬の先端の岩場に座り、泣きながら夕日を見た。

4 日目以降、最大の難所といわれる七戸峠などもあったが、特に苦だとも思わなかった。結局 8 日間で四国を一周することが出来た。この旅は室戸岬で終わっていた。四国一周と言うと、何か一つの大きな成果のように思われる。だが、何も意味が無い。自分にとっての苦難を乗り越えたことに意味があった。寂れた小さな漁村と室戸岬の夕日が、今も前へ進めと励ましてくれる。苦難の中に道がある。

【週行事予定】

月	日	曜	行事予定	FT	課外	備考
1 2 月	7	火	⑦未来戦略課	○	A	7:25 登校
	8	水	寺子屋にちなん 16:00-	○	A	7:25 登校
	9	木	⑦LHR・・・学年レクレーション(男女混合バレーボール)	○	A	7:25 登校
	10	金		○	A	7:25 登校
	11	土	土曜講座 A	×	×	8:15 登校
	12	日				
	13	月	教科会 学年会	×	B	7:25 登校
	14	火	⑦未来戦略課 派遣委員会	○	B	7:25 登校
	15	水	職員会議	×	B	7:25 登校
	16	木	⑦LHR・・・学校安全実践地域訪問報告会	○	B	7:25 登校
	17	金		○	B	7:25 登校
	18	土				
	19	日				